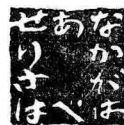


昭和二十九年十一月二十五日
昭和二十九年十一月三十日
初版印刷
初版發行

昭和文學全集 49
中河與一 芹澤光治良 集
阿部知二



著 者

發 行 者

印 刷 者

東京都品川區大井寺下町一四三〇

發 行 所

株式會社

角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七

振替東京一九五二〇八
電話九段〇一一〇二四

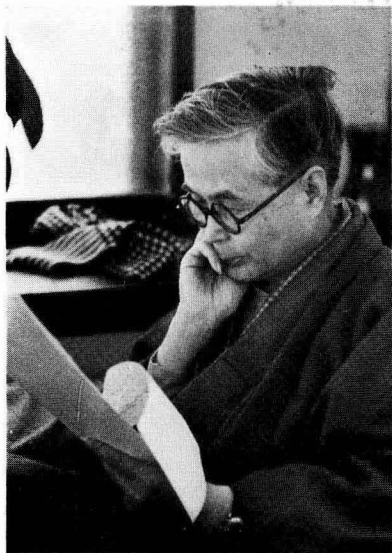
本文紙 本州製紙株式會社
クロース 日本クロース工業株式會社
整版所 中光印刷株式會社
印刷所 東日本印刷株式會社
製本所 中央製本所



阿部知二
昭和二十五年五月（四十七歳）



中河與一
昭和二十四年頃（五十三歳）



芹澤光治良
昭和二十九年三月（五十七歳）

中河與一
阿部知二
芹澤光治良集

昭和文學全集
角川書店版

目次

卷頭寫眞
中河與一
阿部知二
芹澤光治良

黒い影

ヨーロッパ紀行より

豊田三郎

二六

二五

二五

二六

解説

年譜

中河與一集

筆蹟

天の夕顔

失樂の庭

悲劇の季節

鬚

或る心中の話

鏡に這入る女

解説

年譜

十返 肇

三三

年譜

解説

秘蹟

ブルジョア

巴里に死す

筆蹟

芹澤光治良集

九

四

七

二四

二九

一三

三〇

古谷綱武

三六

三五

三六

三七

三七

阿部知二集

筆蹟

冬の宿

一五

中河與一集

蒼術といふ
事といひ
常とせ良久
とある

カ何直

天の夕顔

つれづれと空ぞ見らる思ふ人
天くたり來むものならなくに

和泉式部

第一章

信じがたいと思はれるでせう。信じるといふことが現代人にとつて如何に困難なことかといふ事は、わたくしもよく知つてゐます。それでゐて最も信じがたいやうなことを、最も熱烈に信じてゐるといふ、この狂熱に近い話を、どうぞ判断していただきたいのです。

わたくしは一つの夢に生涯を賭けました。わたくしの生れて來たことの意味は、だから云つてみれば、その儚なげな、然し切なる願ひを、どこまで貫き、どこまで持ちつづけたかといふことになるのです。ばか／＼しいといつて、人は、恐らく身體をふるはしてわたくしの徒勞を笑ふかもしれせん。それが現代です。然しわたくしにとつて、それは何事でもあり得ないのです。わたくしは現代に生きて、最も堪へがたい孤獨の道を歩いてゐるやうに思はれます。

わたくしが初めてその人に逢つたのは、わ

たくしがまだ京都の大學に通つてゐた頃で、その頃、わたくしはあの人の姿を、それも後妻などを時々見てはまた見失つてゐたのです。格別美しい人とも思はれなかつたのですが、どんな關係の人か、わたくしのゐた素人下宿の、部屋の向うなどで、見えてゐるかと思ふと、また何時か見えなくなつてゐるのでした。

間もなく、その人がそのうちの娘であり、今は結婚して誰れかの夫人になつてゐるのだといふことを知るやうになりました。

或る朝、彼女はわたくしの部屋へ挨拶に來ると、自分の夫が今、外國に行つてゐる事や、間もなく自分はたつた一人の母を失ふかも知れんといふやうなことを話して歸りました。何か訴へるやうな悲しいものがあつたのを覺えてゐます。

その人の母親、つまり下宿の女主人が入院してゐることは知つてゐましたが、そんなに悪いといふことをわたくしは知らずに居りました。

そのうちにその人が死なれ、あの人は黒い喪服をつけて、泣きながら母親の葬列に従つてゐるのでした。總てが何か不思議に思はれる、異様な状態で、短い間につき／＼に起つたやうに思はれました。

その前のお通夜の夜は、わたくしも一緒に、お通夜をしました。その夜、あの人の一人の子供が、夜がふけてから座蒲團の上に頭を

つけたまゝ眠つてしまつて、それを見つけたあの人の叔母が、もう一枚、上からボンと座蒲團を、小さい身體の上にかぶせたので、本當の饑頭のやうになつた子供が、ひとしほあはれにみえたのを覺えてゐます。

四十九日の觀音講にも來てほしいといふのでわたくしは出かけてゆきつくり感じられる筈はなく、わたくしは間もなく歸つたのですが、すると、あとから供へ菓子ごととけられ、儀式めいた手紙ながら、あの人の文章で、わたくしが他人さびず、母親の入院當時見舞に行つたことや、何くれと昨日今日手傳つた事に對する禮などが、達筆でしたゝめてあるのでした。

その頃のわたくしは、もうそこから下宿を變つて、神樂ヶ丘の近くの知人のうちに移つてゐたのですが、どういふわけか、わたくしにはその通り一べんに見える手紙がうれしくてたまらなかつたのです。自分のした事に單純な善行があつたからかもしれません。然し實は、さういふことはとても恐ろしい惡魔を、何時も背後にひそませやすいものはないといふことを、あとで考へるやうになりました。

わたくしはすぐ返事をかきました。あの人の悲しい氣持などをい／＼と想像して。

すると、また手紙が來て、それには、生前、母が何時もあなたを讀めてゐた。母の思ひ出をつなぎに、そちらへ參つたら、また御目に

かゝりませうと書いてありました。

然しわたくし達は逢はなかつたのです。わたくしは友達などと、時に頰(ほ)を口にするほど、實は頰(ほ)を拒否する強情さを持つてゐる青年だつたのです。そのうち、何かをきつかけに、郵便で、わたくしはあの人から本を借りたことがあります。何しろわたくしは、天體物理の學生で、そのせゐか、趣味としての女性の文學ほど、その頃のわたくしにとつて、ふか／＼と美しく思はれるものはありませんでした。

それは翻譯の「アンナ・カレーニナ」で、讀みすゝんでゆくうちに、わたくしは丁度アンナが雪國の汽車からおりて來て、ウーロンスキイと不幸な、然しこの世で最も喜びに溢れた逢ひ方をするあたりで、小さい一枚の名刺を見つけたのです。

それは名刺とはいへない、ほんの紙切れといつた方がいゝかもしれません、普通の名刺を半分に切つた位の細いものに、見るともなく見ると、細い字で、「何時も逢ひたいと思ふばかりに」と書いてあつたのです。

格別、わたくしに宛てたものである筈はないのですが、わたくしはそれを幾度も幾度も眺めなほしました。

ところが、次ぎに借りた「ボヴァリイ夫人」にも、そんな葉(は)が追入つてゐて、それには、

わすれじの行末(やうすう)までは難(むづ)ければ
今日(けふ)を限(かぎ)りの命(いのち)ともがな――

といふ高内侍(かうないじ)の歌が書いてありました。

彼女が誰れかに宛てたものか、誰れかが彼女に宛てたものか、それとも彼女がわたくしに宛てたものかと考へあぐんだ末、少なくとも、それが自分に宛てたものでない事だけは、確かだと考へたのです。それは一切の誰れに宛てたものでもなかつたと考へるのが一等似つかはしく、そればかりか、誰れともわからぬ人が、寧ろそこはかとなし心を書きつけたものと考へると、ひとしほにその優しさが身にしみるのでした。そしてわたくしもまた、その紙切れのうしろに、誰れに宛てるともなく、何か書いてみたいとさへ考へるのでした。

そんな状態のまゝ、わたくしは何かクサクサする別のことがあつて、暫くあの人に手紙をださずに居りました。

すると、あの人から手紙が來て、それには何かお互ひの間にわだかまりがあるのではないかしら、若しさうだつたら打ちあけてほしい。二人の間に、どんな障害でも心にあるのは堪へられないと書いてあるのです。

わたくしはその手紙の意味をどう解釋すればいいのか了解に苦しみました。それで、それはどういふ意味か知らしてほしいと、折り返して問ひあはせの手紙をだしたのです。す

ると、そんならそちらへ行くことがあるから、其の時御目にかゝつてお話しませう、と返事がしたゝめてありました。

丁度六月の末で、石榴(ざくろ)の赤い小さい花が、葉の中に見え、わたくしは試験の用意に忙しい頃でした。王禪寺からの歸りみちだといつて、あの人(あの人)が立ち寄つてくれました。王禪寺はあの人(あの人)が嘗て參禪したところであり、また母親のお骨を最近納めたところでもあつたのです。

折あしくわたくしは夕食の時間で、そのことをいふと、彼女は何か落附かぬらしく、それでも其の間の待つ間(まち)にもと、わたくしから本を借りようとしたのです。わたくしは何を出したものかと、何か心ひけながら、幼い文學の本を出したのを覚えてゐます。

わたくしが食事をすましてゆくと、彼女は嬉しさに立ちあがり、もう一度挨拶をしながらしてから座蒲團に坐りました。然し其時の彼女の顔は何か眞つ青で、わたくしにはそれが不可解に感じられました。

「お顔が眞つ青ですね」
すると、あの方はそれを説明するやうに、暫くして言つたのです。

「わたくし、ルビーの石を落しましたもんですから。歸りみちで」

「惜しい事をしましたね」
「でも、なんでもないんですけれど、その事は」

それから土産だといつて、櫻ん坊の籠を出し、話をしながら、まさかへし、くりかへし、ハンカチをもみく／＼してゐました。そしてその日、彼女が話してくれたことは、自分の結婚は不幸ではなかつたが、主人が洋行に出發した翌日、荷物を片づけてゐて、ふと日記を見ると、そこには主人が他の女を愛してゐたことが書いてあり、今もその女に追跡せられてゐる爲めに、その苦しみから逃げようとして外國に行かうとしてゐるのだ、といふことがわかつたといふやうなことでした。

言つてみれば、それは自分への愛情とも思はれるのに、それから長い間、あの人はその事實に悩んでゐたといふのでした。外國へ言つてやつても、そのことに就いてだけは、ふれることが苦痛なのか、何の返事もくれないし、さうかといつて何の仕様もくれない、今は矢張り主人を愛さうと決心し、子供もあることであるし、どんなに夫が外國から長く歸つて來ないでも、待つてゐようと心にきめてゐたといふのです。

そんな時、丁度わたくしと逢つたのです。が、弟のやうなわたくしと交際する事は、何か姉弟の親しさのやうに、この上なく幸福であつたが、若しわたくしが、あの人を愛してゐるのではないか、と考へると、その事に危険を感じだしたといふのでした。

「それで、わたくしは」

あの人は力を入れていふのでした。

「今はいゝけれど、この上交際をつゞけてゐると、わたくし、自分の立場が苦しくなりさうに思はれて來ましたの。だから今日は、お別れにまゐりましたの」

「何ですつて」

わたくしは意外の結論に言葉がつまると、それでも率直に自分の心を言ひました。

「僕は戀愛の氣持ちは無かつたつもりですが」

「でも」

「僕は友情と考へて來ました、だから今のままで決して危険は無いと思ひますが」

わたくしは彼女が、今日は別れに來たといふ最後の言葉に、少なからず狼狽してつゞけました。

「でも、わたくしはもう決心して參りました」

「……………」

「……………」

「そんなら僕は、もう、これつきりだとおつしやるんですか」

「さう考へて參りましたの」

卓を隔てて端坐してゐる彼女には、何か威嚴のやうなものが現はれ、堅い決意を述べるその強さに壓倒されて、わたくしは、もう何も言ふべき術も知りませんでした。

これが、わたくしが、彼女と逢つて、彼女から突き離された最初でありました。

然し、その爲めに、わたくしは今に至る二

十幾年、あの人の事を思ひつゞける運命を持つやうになつたのです。わたくし達は生涯をかけた。これは、どうお話すればよいのか。わたくしは、あの人を思ふ思ひに、今も堪へがたい命を生きてゐるのです。

その日はもう暗く、わたくし達は初めて、一緒に肩をならべて歩きました。

つひぞ逢ふ事もなくて、こんな氣持になつてゐるのが不思議に思はれました。もつとも、わたくし自身は冷靜のつもりだつたのです。

それにしても、こんなに優れた人と結婚してゐても、他の女を愛するといふ男の心理を思つて、わたくしは、それが考への及ばない氣がしました。その時あの人はふとわたくしに言ひました。

「お背が高くいていらつしやいますのね」

何でもない言葉ですが、その中には、この一刻が、最初で最後であらうと、思ひつめてゐるあの人の激しい悲しみが溢れてゐたと、あとになつて、わたくしには幾度も思はれるのでした。

ふと見ると、彼女も、女としては高い方であつたが、それでもわたくしの肩の下あたりにあの人の髪が見えました。

熊野神社前まで歩いてゆくと、丁度電車が來て、あの人は前から乗りました。

動くまでちつと、わたくしは見えてゐました。燃えるやうな眼で、あの人もわたくしを

見てゐましたが、やがて電車が動くと同時に、深いお辭儀をし、間もなく電車が角を廻ると、彼女は見えなくなつてしまひました。その翌朝、わたくしは封緘ハガキの手紙をあの人から受取りました。その中には――

わたしはボンヤリしてゐたので電車で乗つたまゝ七條の驛から島原の方までつれてゆかれました。驛にたどりついて鏡に映つた自分の顔を見た時は、眞つ青で、自分ながらに今にも倒れはしないかと思はれるほどでした。神戸のうちへ歸りましたら夜ふけの十一時。でも、この事だけは申上げまいと思つてゐましたけれど、嗚呼、今は、もう全部申上げてしまひます。本當にわたくしは何時の間にか、熱情をそゝいで貴方をお愛し申上げて居りました。二十八の今日まで、貴方のやうな方にわたくしは一度もお逢ひした事ありませんでした。どうぞこんな事を申上げるのをお許し下さいませ。わたくしは初め、あなたに歩調の亂れを見たら、すぐにも戒めようと、何時も考へて居りました。それなのに、先きにわたくしの方が駄目になつてしまひました。そればかりか、今となつては、不自然な愛情といふものを平生から笑つてゐた自分の單純さが恥ぢられてなりません。わたくしは母を失ひ夫を失ひ、今は友情をも失つたや

うに思ひます。でもそれはどうにもならなかつたことでございます。わたくしがあの時、本をお借りしたのは、自分の心臓の烈しさを匿くす爲めでございました。またわたくしが青ざめてゐたのも、決してルビーの爲めなどではなく、最後のお別れを言はうとする決心が、わたくしをあんなに悲しましてゐたのでございます。でもわたくしはもう最後のお別れをいたしました。だからと思つて何もかも書いてしまひました。わたくしはどんなに自分に打ち勝たうと思つたでございませう。わたくしは何時か自分が冷靜な心にとりもどし、何處までも美しい友情に終始して、貴方様を傷つけず、またわたくし自身も最初からの固い決心を貫いて、妻として母として生きぬかうと、どんなに考へたかも知れません。然しみな力が及びませんでした。それは今後の事はわからず、何時かいとお友達になれる日がないとも限りません。でも今、わたくしの内心の聲は、電撃のやうに否と強く否定して居ります。それでわたくしは、もうお目にかゝるまいと、悲しい今度の決心をいたしましたのでございます。

もらへば、きつとその心配も一掃せられるでせう。僕は寧ろそれを願つてゐます。――と書きました。

然しあの人からは、それつきりもう手紙も何も來なくなつてしまひました。だからそれは決して愛の廻り道ではなく、その決意の堅固さが既に感じられ、わたくしはそれと思ふと、反つて急にあの人を追つかける心理が強く起つて來たのです。

八月下旬の夕ぐれ近く、わたくしは、ちつとしてゐられなくなると、あの人を神戸の端の熊内を訪ねてゆきました。あの人ほど燃えてゐなかつたわたくしが、あの人にはもの足りなかつたのではないかと、今はそんなことも考へられるのです。

傾斜の多い神戸の街をすぎて、布引の山の弓なりに彎曲してゐたあたり、丁度その中に抱きこまれてゐるやうな高みのところに出、それから硝子張りの洋風の家などのならんでゐるあたりで、わたくしは、やつとあの人のうちの門札を見つけたのです。

すると何時かの、あの人の子供が走つて來たのです。

「廉ちゃん」

わたくしが覺えてゐて呼ぶと、

「あゝ」

そして子供が、「お母ちゃん、人が來てゐるよ」と言つたかと思ふと、家の中から格子をあけたのが、あの人だつたのです。華美な浴

衣があだつぽく、それでゐて、何時か見た喪服の幻影が、その影につきまといつて見えました。

二階に通されました。大阪の方の町の灯がチラ／＼と海の向うに見えました。それをあの人が指さして説明してくれました。それは賑やかにみえて、はかなく、人間のいとなみといふものを、大きい自然の暗黒の中で淋げにまたゝかせてゐました。

間もなく、賑ちやんは紐のついた浴衣に着かへさせられて、寝かされ、わたくし達だけになりました。

「よくおわかりになりましたのね」

「どうしても逢ひたかつたもんですから」

「でも、わたくしはもう、堅く決心いたしました居りますわ」

彼女の眼には堪へられない涙が光り、それでもその決意には、依然として動かしがたいものがあるやうに思はれました。

「でも、わたくし、毎晩、初めからあなたの御手紙を出しては全部読みましたわ。讀みなほさないで眠れなかつたもんですから」

「ちや、それを全部破つてしまひませうか」

わたくしは彼女の決心に沿ふやうに言ひました。わたくしはさういふ男です。決意といふことの烈しさを、人生の契機として、どんな事でもやりとげるといふ剛毅さを好む性格だつたのです。

すると彼女は楽しさうにその手紙の束を持

つてきて、そこに置きました。そこでわたくしは、取りあげると、あの人の面前で、それを次ぎ次ぎに強く引きさいてゆきました。然しひき裂くことに、彼女の心を引きとめようとする心理がなかつたとは勿論云へません。あの人はボロボロと涙を流しながら、それをダツと見てゐました。

「一通だけでも」

低い聲で彼女がさう云ひました。然しわたくしは、一通も残さずに狂暴な心理で、全部それをひき裂いてしまひました。

さうしてしまふと、今度はその事から起る新しい感動を求めて、わたくしは歸りたくなつたのです。あの人とても、勿論歸れることは恐ろしかつたのに相違ありません。

それでも終電車が無くなるので、わたくしは、やがて立ちあがるより仕方がなくなりました。

「ちや、これで」

「ちや、もう、これつきりですのね」

そしてあの人の部屋から階段におりようとした時、二人が向ひあつた時、あの人の身體に電氣がかゝつたやうに、一瞬間、くね／＼としたのをわたくしは見たのです。同時にわたくしもそれを感じ、何か恐ろしいものが身體の中を走るのを感じました。

然しわたくしは、間もなく身を翻すと、階段をおりてゆきました。二人は恐らくその

時、理性を越えて、互ひに飛びつきあひたかつたのに違ひありません。だが、それをしなかつたといふところに、寧ろ吾々の今日までの愛情の形式があつたやうに思はれます。

わたくしは狂氣したやうな氣持ちで、坂みちを走りながら下りてゆきました。あの人もあとからついて来て、阪神電車の大石まで、わたくしを送つてくれようとしてました。眞夏の夜もさすがに更けて、涼んでゐる人もなく、二人は殆ど口もきかずに、黙つたまゝ歩きつづきました。ポーツと瓦斯燈のともつてゐる前へゆくたびに、後にあつた二人の影、が急に早廻りすると、それが急に前に倒れ、足もとから、眞つ黒に延びい行つたのをハッキリ記憶してゐます。

終電車が來ました。兩方でお辭儀をしました。わたくしは手もふらず、ぢつとあの人を見つめて居りました。それつきりでした。あの人の心は、もうどんなにしても動かかなかつたのです。

第二章

それから二年。わたくしはあの人の言ふ通りにしてゐたのです。わたくしには堪へられないものがありました。然しあの人の避けるものを、あの人以上に求めたり、誘惑しようとしたりすることはわたくしには出来なかつたのです。わたくしはあの人の精神的な苦悶がわかり、それを尊敬し、あの人の心を主に

して、それに従ふことに本當の愛を見つけてゆかうと考へてゐたのです。

すると二年目の六月、突然あの人から手紙が來たのです。それには新聞で見たと言つて、わたくしは父の計に對する哀悼が述べてあり、自分はやつと過去の境涯から出る事が出來たやうに思ふと、半ば感謝のやうな心もこめて書いてあつたのです。

わたくしはそれを、父の死といふ不幸の中で、どんなに喜びにみちて讀んだでせう。わたくしは、すぐ彼女のうちへ行きました。そして言つたのです。

「御手紙いたゞきました。もう一度前のやうにお逢ひ出來ると思つて喜んで來ました」

「でも、危いことないかしら」

彼女はさう言ひました。

「だが、御手紙には、昔の心境から脱したと書いてありましたが」

わたくしは歎願するやうに言ひました。

「でも、焼木杭に火がつくといふことがありますがわ」

それから續けて言つたのです。

「ぢや、いけないと思つたら、わたくし、すぐ逃げだしますわ。その時決してお引きとめにならないでいたゞきたいの」

それは優しい女ころといふよりも、何か求道者の切ない心で言はれてゐるやうに思はれました。

「よくわかりました」

わたくしは躍りあがるやうに喜んでさう答へました。斯うしてあの人との再度の交渉が初まりました。二十三の夏の初めでありまして。

それから幾度目かに逢つた時、あの方はしみと話しました。

「わたくし、あなたを思ひ切らうとして、どんなに苦しんだか知れませんでしたわ。でも、それはみんな駄目でした。あなたが何時も坐つていらつしやつた座蒲團の上に、あなたのお姿が何時も見えて仕方がありませんでした。けれど、わたくしは靜かに苦しいわたくしの思ひに堪へてまゐりましたの」

わたくしは、さういふ話を聞く時、人間の愛情といふものが、如何に克己によつて神聖化せられ、美しくなるかといふことを感じ、さういふ話を聞くにつけて、餘計にあの人を崇高に感じるのでした。わたくしはあの人を普通の人間に引きさげて考へては、またそれが何時も出來なくなるのでした。

あの方はわたくしよりも七つ歳上でした。

あの方の複雑な心理は、わたくしなどには到底わからず、わたくしはどれほどあの人を尊敬し、そのたびに自分を反省し、自分をすなほにしたかと思はれていました。

わたくしは正直に言ひました。

「僕もお別れしてから、どうかすると、若しかして、あなたが來て下さるやうな事は無からうかと、それはかり考へるやうになりました

た。人力車がホロをかけて通つたりすると、あなたが、その中にあるんぢやないかと思つて、わたくしは、すれちがふ人力車を幾度ものぞき込んだり、前へ走つて行つて、乗つてゐる人の顔を見たりしました」

向きあつてゐる時は、そんな話を、それも平凡にあたつてまへの口調でしか話さなかつたのですが、然しわたくし達は、お互ひの眼の中にお互ひの宿命の暗示を既に何時も讀んでゐたやうに思はれます。

何時であつたか、それは何時もとは少し變つた調子でしたが、あの方が言ひました。

「お別れしてから間もなくの頃でしたわ。わたくし、流行性感冒にかゝつて二週間ほどやすんでゐたことがございました。熱が四十度を越えて、それが二三日も續いたことがございました。その時、わたくしは若し今死ぬんだつたら、さう思ふと、最後にどんな事があつても一目だけでも、あなたにお目にかかつてから死にたい。誰れに逢はなくても、あなたにだけはお逢ひせずには死にきれない、とさう思つて泣きながら遺書を書いてゐますと、階段の下に、あなたの足音が聞えて來て、あゝやつぱりあなたが來て下さつた。わたくしの最後の日にわたくしをお呼びになるあなたの聲まで聞えてくる。そこでハイと返事をして、立ちあがらうとするんですけれど、膝が立たないので、にじりながら、慄へる身體で階段の上まで、やつとで行つた事が

三度も四度もございました」

さういふ話をしてゐる時のあの人の顔は、一層その美しさが燃えてゐるやうに思はれました。そして何か宗教的にさへ思はれました。

わたくしはあの人の顔を見つめながら、さういふ話をどんなに胸をどつて聞いたでせう。あの人の美しさ。それは最早わたくしにはもう絶對的なもので、それ以上のものがあるとは思はれませんでした。かと言つて、わたくしは、何も盲目的にそれを言つてゐるとは思つてもらひたくないのです。といふのは、少女時代の寫真などに見るあの人は、決してわたくしには好きとは言へなかつたのです。然し今、わたくしの眼の前にゐる、あの人は！

何よりも深遠で、情熱を含んだあの靜かな強さが、何時もわたくしを苦しめるほどに執着させるのでした。

どつちかといふと、眉と眼の間が近く、頬から頬へかけての線の美しさが、少し大きな木彫のやうな唇と調和して、その横顔を何ともいへず氣高くし、それが何かの動作で動く、反つて今にもくづれさうな風情を感じさせるのでした。

あの人の話聲は含んだやうな低いアルトで、身體つきには少しばかり思ひあまつたやうな猫背があつて、殊に腰から下が長く、それらが何ともいへず女らしい姿に思はれるの

でした。

信州の上松の豪家に生れて、女學校時代は東京で過したといふことであり、父親が熱心だつたところから、自然幼い頃から父親と一緒に參禪したりすることも多く、その爲めかどうか、計りがたい奔放さと禪機のある反省が、ふつとして現はれるといふやうな性格でありました。

さういふ關係で、結婚も王禪寺の管長を仲人にして、今も夫の留守の間、管長に逢ふことを、一つの務めにしてゐるといふのが彼女の狀態でありました。

「老師は何時もおつしやるのよ。——愛慾の垢盡くれば道見ゆべし——つて。でもわたくしには一體何時道が見えるのかしら」

或る朝、早くからわたくしは自分の下宿を出ると、西隣の、あの人のうちへ出かけて行つたことがあります。

「あら、今日は御いでにならぬかと思つてゐましたのに」

わたくしはその頃、劍道にこつて、その日は丁度その稽古日にあたつてゐたので、あの人もそれをちやんと知つてゐたのです。然し彼女はわたくしを見ると、嬉しさうに、いろいろな菓子や果物を、次ぎ次ぎにわたくしに出してくれて、

「わたくしも、京都へは幾度もまゐりたいんですけれど。でもあの人がゐるでせう」と言つて、話したのです。それは、彼女

の夫の洋行費の全部を支出してくれてゐるばかりか、彼女への心づかひも氣にかけてくれてゐるといふ、關西財閥の一人で、彼女は彼を徳としながらも、半ば恐れ、殊に氣づかれて、わたくしと逢へなくなつたら、と何時もそれを心配してゐたのです。

然しそれは、その事だけではなかつたのです。もう一人彼女を愛してゐる男があつて、その事をも同時に彼女は苦にしてゐたのです。

「外國からは郷里へ歸れと言つて來ますし、それでも此處にゐられるのは、老師が近いといふ理由だけなんですけれど、實は老師のうちにも行きにくいことがありますの」

それは老師の三男で、この頃學位を取つたばかりの醫者で、彼もまた彼女を愛してゐるといふことが、此頃になつて分つたといふのでした。

「でもいゝ方ですわ。わたくしが何かあやまちをして老師から叱られてゐても、あの人は何時もかばつてくれましたわ」

わたくしはそんな話をきくと、何としても不安でたまらなかつたのです。自分が逢はなかつた間は、新しいさういふ事態が、既に幾つか起つてゐることを聞くだけでも堪へられなかつたのです。

然しその後、その醫者は、彼女への愛情を老師に見破られて、人妻に對する不倫の愛情をひどく叱責せられた上、きびしい監視で